

第55回 信行寺仏教講座 (日帰りバス旅行 事前研修)

東西本願寺に分かれた経緯 ～織田信長と本願寺～

令和7年11月25日 (火)
信行寺住職 四夷法頭

第8代宗主・蓮如上人の時代



蓮如上人(1415－1499)は東山の太谷の地で、当時天台宗の末寺であった本願寺の第7代宗主・存如上人の長子として誕生。

微々たる規模の本願寺を、一代で日本最大の仏教教団に押し上げたことから「本願寺中興の祖」に位置づけられる。

山科本願寺の建立



「寺中広大無辺、莊嚴ただ仏国の如し」
(『二水記』)

蓮如上人は寛正の法難で比叡山に破却されて以来の本願寺を、山科にて復活することを決意。文明15年(1483)完成し、山科に壮大な大本願寺が18年ぶりに出現。総面積30万坪という空前の「大本願寺」。

しかし、1532年に山科本願寺は戦国大名・細川晴元軍や日蓮宗徒らに囲まれ、防戦むなしく陥落炎上。

大坂御坊の建立



大坂御坊 (のちの大坂本願寺)

蓮如上人は山科本願寺に続き、明応5年(1496)に大坂に地に御坊を建設。山科本願寺が破却された後、第10代宗主・証如は大坂御坊を新たな本願寺とした。天正8年(1580)まで続く「大坂本願寺」時代が始まる。

大坂は「虎狼のすみか」と形容されるような土地だった。すぐ近くに巨大な貿易港があり、川と海に囲まれた要害であり、政治的・経済的に要衝の地になりつつあった。

蓮如上人はその整いすぎた条件に一抔の不安も覚えていた。

梯 實圓和上『蓮如 ～その生涯と軌跡～』



梯 實圓 (1927～2014)
浄土真宗本願寺派 勸学

いま大坂は「大阪」と表記するようになっているが、もともとは「大坂」であった。その大坂は、豊臣秀吉が開いた町であると思いこんでいる人が多い。しかし、大坂（おおさか）という地名を確定したのは蓮如上人であり、上人が創建された大坂御坊を発展させた石山本願寺がもとになって、近世の大坂の町は開けるのであるから、近世の大坂の歴史は蓮如上人とともに始まるというべきであろう。

そもそも、この当国摂州東成郡生玉の庄内大坂という場所は、古い昔からすでに私が坊舎を建てるという約束事でもあったのだろうか。（中略）それにつけても私がこの場所に居住した根本の理由は、決して一生を安楽にすごしたいためや、華やかで贅沢な暮らしをしたいため、また花鳥風月を弄びたいためではない。「ああ浄土に参らせて頂き、この上もないさとりを得るために信心を決定した行者がたくさんいて、念仏を申す人々が出来てきてくれればな」と思うこの一つの思いを携えているばかりである。

またいささか世間の人々の中には、偏見をもって私たちを敵視する連中もいて、難題をふっかけられるようなことがあるときは、速やかにこの土地に執着することなく、出て行くがよい。（『御文章』大坂建立章）

蓮如上人の不安がやがて現実…

戦国時代最大の宗教勢力である本願寺と、天下布武を目指す織田信長が、大坂本願寺の地をめぐり11年間にもわたって争う。いわゆる「石山合戦」である。この合戦がきっかけとなり、東西本願寺に分かれる。



織田信長

第11代宗主・顕如上人の時代



第11代・顕如上人

顕如上人（1543～1592）は戦国時代から安土桃山時代の浄土真宗の僧で、本願寺第10世・証如上人の長子。1554年、父証如上人が39歳で往生。その前日に得度した顕如上人は12歳で法灯を継承する。もともと本願寺の次期宗主となる嫡男は、代々天台宗の青蓮院で得度することになっていた。しかし、顕如上人は証如上人を師として本願寺で得度している。

顕如上人、15歳で左大臣・三条公頼の3女、如春尼と結婚。翌年に教如上人が誕生する。

※如春尼の一番上の姉は、幕府の実力者・細川晴元の妻、2番目の姉は、戦国武将・武田信玄の妻。

長男の教如上人が誕生した翌年の永禄2年（1559）、本願寺は正親町天皇の勅許により、最高位の寺格である「門跡寺院」に列せられる。同年8月17日付のキリスト教の宣教師、ガスパル・ヴィレラの手紙には、「この宗派（本願寺）は信者が多く、庶民の多数はこの派に属す。…中略… 諸人の彼（顕如）にあたえる金銭は甚だ多く、日本の富の大部分はこの僧の所有なり」とある。

顕如上人は本願寺が史上最も華やかだった時代の宗主であり、同時に戦国という動乱の時代に翻弄され、本願寺の存亡に関わる困難な選択を、無数に迫られた宗主でもあった。

各地に点在する「寺内町」の存在

寺内町とは、一般に真宗の大寺院を中心に形成された町をいう。寺院を中心に「碁盤目」状に区画され、商人・職人、宿などの多屋が密集して建ち並び、町の外周は自衛のために頑強な高い堀や、深い濠で区切られ、町全体が「宗教都市」として異空間を醸成していた。

大阪八尾市「顕証寺」とその寺内町



蓮如上人の山科本願寺の頃、すでに洛中と変わらないほど寺内町が繁栄したとの記録もあり、本願寺が大坂に移ると、寺内町は諸税の免除に加えて、犯罪者の逮捕、周辺関所の通行料減額など自治区として多くの特権を獲得して、いっそう活性化。

こうした特権をもつ寺内町が、摂津・河内・和泉・近江・紀伊、さらに北陸や中国地方などにも作られていった。



奈良県橿原市の称念寺を中心とする寺内町

一向一揆の脅威

通常、大名の力とは領土内にどれほどの民を有するのかがというのが基本。一方、本願寺は大名ではないため、特に領土があるわけではない。しかし、多くの大名の領内にそれぞれ膨大な数の本願寺門徒がおり、寺内町もある。この門徒たちが自らで、あるいは時に宗主の命によって、たびたび「一揆」と呼ばれる行為を行っていた。

その勢いは、ひとたび起れば怒濤の如く敵を圧倒し、蓮如上人の時代には、門徒衆が加賀の守護大名・富樫政親を破り、加賀国が真宗門徒の自治区となった事例もある（百姓の持ちたる国）。これは特に「一向一揆」と呼ばれ、大名たちにとって大きな脅威であった。

当時の本願寺とは、全国津々浦々に存在する無数の門徒衆と、特権により保護された寺内町。これらを基盤とした圧倒的な経済力と武力を持ち、社会的には「門跡寺院」という最高位の寺格も有する。まさに日本全土に横たわった巨龍ともいえるべき存在感。

⇒ **牙をむく新興の戦国武将、織田信長**

時代の寵児・織田信長

本願寺が門跡寺院となった翌年の1560年、尾張で大きな事件がおこる。当時、天下最強と目されていた大名・今川義元は、駿河を本拠として遠江・三河さらには尾張にまで支配を広げていた。そんな彼が自らの軍4万人を率い、京を目指して西進する途中、尾張の桶狭間で、わずか「尾張半国」の支配者が率いる4千人程度の軍によって討ち取られた。

その支配者こそ織田信長だった。これにより「織田信長」という名は一躍、戦国社会を駆け巡った。

※この戦いで今川方から織田方へと移り、同盟を結んだのが松平元康こと、のちの徳川家康である。

永禄10年（1567）、信長は美濃を奪取して岐阜城へ拠点を移すと、「天下布武（武力を布き天下を統一する）」と宣言し、美濃・尾張に点在した寺内町を次々と破壊。

永禄12年（1569）、足利義昭を奉じて上洛。瞬く間に畿内を制圧。さらに畿内の本願寺系有力寺院に矢銭を要求し、応じない場合には取り潰しなどの措置をおこなった。本願寺には「京都御所再建費用」の名目で5千貫（5億～7億5千万）を請求し、顕如上人はこれを支払った。

さらに自治都市として繁栄の極みにあった巨大貿易港、堺の町に2万貫を要求。拒んだ堺は信長の圧迫を受け、堺は信長の手の中に。信長は本願寺（寺内町）へ要求を重ね、ついに大坂の地から退去を要請。

⇒ **顕如上人の苦悩**

石山合戦の背景

応仁の乱を経て、大名達の覇権争いが激化し、将軍は傀儡化（あやつり人形）。幕府の復権を目指した室町第13代将軍・足利義輝が三好長慶の家臣・松永久秀と、「三好三人衆」こと、三好長逸・三好政康・岩成友通らによって暗殺される。長慶の死後、勢力が弱まった三好方からすれば、実権を握ろうとする将軍の存在は邪魔であり、自分達にとって都合のいい将軍の擁立を目指した。結果、第14代将軍に義輝の従兄弟である足利義栄が就任。しかし、わずか8ヶ月のみの将軍で、京都に一度も入ることがなかった。

一方、13代将軍の義輝方から次期将軍と目されたのは、義輝の実弟・足利義昭。当時、興福寺一乗院で出家していたが、越前の朝倉義景のもとへ身を寄せる。その間に、義栄が14代将軍に就任。

義昭は名だたる大名に「自分を京都に連れて、三好達を倒して将軍につかせてほしい」と手紙を出す。

戦国時代のため、大名たちは迂闊に動けない。そんな中、義昭を奉じて上洛の名乗りをあげた男が織田信長だった。

永禄11年（1568）、信長は足利義昭を奉じ、6万という大軍勢を従えて上洛。三好三人衆などの抵抗勢力を退け、足利義昭は第15代将軍に。三好三人衆は、地元阿波国へ逃げ帰る。

永禄13年（1570）、阿波国へ逃げていた三好三人衆が権勢を取り戻すべく、7月に本願寺にほど近い野田・福島に築城（三好方は巨大勢力の本願寺をたよりにしていた）。信長は即座に反応し、本願寺とは至近の天王寺に陣取る。このとき信長は、本願寺を所詮「長袖（法衣）の身」と侮っていた。

野田城・福島城の戦い



同年（元亀に改元）の9月12日、総勢5万人の信長軍が、ついに三人衆方(約1万人)へ大砲や3,000挺の鉄砲で「天地も響くばかり」（信長公記）の轟音で砲撃。

本願寺の挙兵、開戦



近江の門徒衆に出された顕如上人の檄文



同日の夜半、本願寺の早鐘が鳴り響く。顕如上人の命により本願寺が信長方へ一斉放射。上人は「開山の一流が退転せぬよう身命を顧みず駆け付けよ。応じない者は門徒たるべからず」と、各地へ檄文を送付。

以降、各地で門徒が蜂起し始め、「反信長」の大名たちが本願寺に呼応。

信長包囲網

同年、近江での姉川合戦で織田・徳川連合軍から大打撃を受けた越前の朝倉義景・北近江の浅井長政が本願寺と同盟を結成。

それに南近江の六角氏や近江・加賀の門徒軍が次々に合流し、「反信長」として一致団結。本願寺が司令塔となり、信長の包囲網を形成し始める。



朝倉義景



浅井長政

「反信長」、比叡山へ

本願寺挙兵の11日後の9月23日、この報を聞いた信長は、急ぎ大坂を後にして京都・近江に戻る。信長の帰還を受け、浅井・朝倉3万人の軍勢は、比叡山に陣取る。攻めあぐねた信長は比叡山と交渉し、味方となるなら横領した寺領を返還するが、拒めば一山すべてを焼き払うと伝える。しかし比叡山はこれを拒否し、朝倉・浅井方についた為、12月まで状況は膠着状態。



比叡山は京都と北陸を結ぶ交通の要衝だった

伊勢・長島門徒との戦い

この間に、顕如上人の檄に応じて蜂起したのが、伊勢の願証寺を中心とした長島門徒。長島には数十の寺院が存在し、本願寺門徒が大きな勢力を持っていた。伊勢・尾張・美濃の農民漁民およそ10万人の門徒衆。信長は、長島にほど近い尾張の小木江城に、厚く信頼していた実弟・信興を置き警戒させていたが、門徒勢の猛攻に一気に城は陥落し、信興は自害。このままでは本拠地の岐阜まで危ういと悟った信長は、朝廷や足利義昭との屈辱的な和睦を受け入れ、岐阜へと帰還。



長島門徒の中心・願証寺

比叡山焼き討ち（元亀の法難）

翌年の元亀2年（1571）、信長は朝倉・浅井側についた報復として、日本最大の仏教聖地・比叡山で根本中堂はじめ、お堂や僧坊のすべてを焼き払い、逃げ惑う僧侶・女・子供たちおよそ三千人を「撫で切り」にする。

神仏をも恐れない男と本願寺との争いが激化するの、この後すぐのことであった。



信長の逆襲

比叡山焼き討ち後、長島というわずか一地区の門徒衆に対して、5万人の軍勢で攻め入る。長島という地は、木曾川・長良川・揖斐川が織りなす川筋が、大小無数の中州を形成する要害地。

水路・陸路と複雑な地形を巧みに活用する門徒勢に敗北。翌々年、ふたたび攻め入るも敗北。さらに翌年、織田軍の有力武将を総動員して、7万人の大軍勢で三たび攻め入る。さすがの長島勢も追い詰められ、長島・屋長島・中江・篠橋・大鳥居の5つの城に籠城。信長は兵糧攻めを開始。

長島城では城主が籠城者の助命を嘆願し、開城降伏を願い出て、信長は了承。ところが籠城者が城から出てきた途端、信長は約束を反故にして3000挺の鉄砲で砲撃。

これに激高した長島勢およそ700人が、叫びながら刀を手にして信長軍を襲撃。これによって異母兄の信広と、実弟秀成などを失う。

怒りが頂点に達した信長は、まだ陥落していなかった残る屋長島・中江の二城に外から火を放ち、老若男女を無差別に2万人の門徒衆を焼き殺した。

室町幕府の滅亡



15代将軍・足利義昭

15代将軍・足利義昭は幕府の権勢を取り戻すべく、「打倒信長」のため有力大名たちに書状を送る。そのひとりが本願寺と同盟関係で、「最強」の呼び声高い「甲斐の虎」こと武田信玄。信玄は京都へ西上する途中で、信長と同盟関係だった徳川家康と激突して快勝（三方ヶ原の戦い）。しかし、間もなくして病死する。

元亀4年（1573）7月、義昭は3千人ほどで挙兵するが信長軍にあっけなく制圧。義昭は京都追放となり、一般にこの時をもって室町幕府の終焉とされる。

信長包囲網の破綻

武田信玄が西上する中、朝倉・浅井軍が虎御前山砦にて秀吉軍に敗退し、朝倉軍は越前に戻る。さらに信玄の死によって、武田軍も甲斐へ退却。これにより、信長は近江や越前に軍勢を向けることが可能となった。

信長は足利義昭を追放した翌8月、越前に出陣して朝倉氏を滅亡（一乗谷の戦い、義景41歳で自害）、同月に三好三人衆の1人・岩成友通を討ち取る。朝倉義景を討った僅か10日後、浅井家も滅亡（小谷城の戦い、長政29歳で自害）させる。

三好三人衆の残り2人の三好政康はすでに病没、三好長逸は行方不明、松永久秀とは和睦。ここに信長包囲網は破綻。

信長、大坂本願寺へ

天正4年（1576）信長はついに大軍を率いて大坂へ侵攻、本願寺と激突。本願寺方では、坊官で軍事参謀の下間頼廉と、鉄砲を操る傭兵集団「雑賀衆」の頭領である雑賀孫市とが「大坂左右の大将」として獅子奮迅の活躍をみせる。

しかし、信長は明智光秀に本願寺の周囲に10箇所あまりの砦を築くよう命じ、史上まれにみる4年にもわたる籠城戦へ突入。寺内町に数万人を抱えて、これだけの長期の籠城戦を可能にしたのは、本願寺の背後、大坂湾から中国地方の覇者で当時最強の水軍を擁した毛利家の後方支援によるもの。



毛利 輝元

当初、信長も先読みして大型の軍船を10艘、小型軍船300艘を配置し海上を全面封鎖した。しかし、毛利軍はそれを上回る兵糧船600艘、軍船300艘という大船団で登場すると、焙烙火矢（爆発炎上する火矢）を次々に打ち込みつつ、巧みな海上戦を展開。

見事、封鎖網を突破して本願寺に大量の兵糧と弾薬を届けることに成功。

しかし、2年後の天正6年（1578）。突如、大坂湾に6隻の「鉄塊」が出現。それは信長が命じて造らせた鉄甲船であった。この船により毛利軍からの支援は断たれ、事実上、本願寺の命脈が尽きた。

和睦の道へ



教如上人

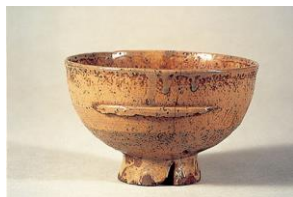
石山合戦がはじまって11年、すでに多くの門徒衆の犠牲者を出している本願寺に、正親町天皇から「講和の道を探れ」との勅命がくだる。実はこの勅命は信長からの「はたらきがけ」で、信長は大坂退去を条件に、門徒総赦免と加賀の返還などを本願寺に提案する。

この条件に反対をしたのが、当時23歳の長男・教如上人であった。

石山合戦の終結

しかし、最終的に宗主である顕如上人の意向が重んじられ、この講和条件で受諾。天正8年（1580）、11年におよぶ石山合戦がここに終結した。

本願寺に伝わる「一文字茶碗」は、織田信長が本願寺との和睦の証しとして顕如上人に贈ったもの。窯の中で碗を積み重ねて焼成した際に、偶然に下にあった茶碗の口縁が横一文字に張りついてできた様から、この名がついた。



教如上人の反乱、義絶

しかし、教如上人は「《聖人の御座所》を信長たちの馬の蹄で踏み荒らされるわけにはいかない」と、父顕如上人の決断に反し、大坂籠城を呼びかける手紙を方々へしたためた。これを世に「大坂抱様」という。

顕如上人は大坂抱様は宗主の意向ではないと各地へ手紙を送付し、教如上人を義絶とし、予定を繰り上げ4月9日に御真影と共に大坂を退去、和歌山鷺森へ。教如上人は支援者と共に必死の防戦を続けるが、天正8年（1580）8月2日について大坂を退去。その晩、本願寺と寺内町は炎上。

2年後の天正10年（1582）、本能寺の変によって信長は没す。この時点で教如上人の義絶が解除される。本願寺はその後、豊臣秀吉の指示によって鷺森から貝塚、天満と場所を移し、1591年に現在地の京都堀川六条へ移動。関白に就任した秀吉は、応仁の乱以降、荒れ果てた京都を本願寺の町場形成能力によって復興しようと企図。その翌年、顕如上人が50歳で往生。35歳の教如上人が宗主に就任。しかし・・・

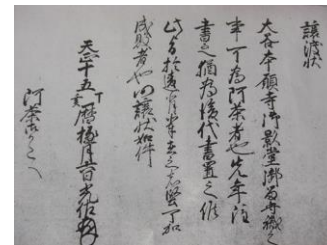


本願寺 鷺森別院



貝塚御坊 願泉寺

顕如上人が往生した翌年、上人の妻、如春尼が秀吉を訪れ、一通の驚くべき譲状を明らかにする。天正15年（1587）付で「後継は三男の阿茶（准如）に譲る」と記されていた。三男准如上人は教如上人の19歳下で、その時点では得度もしていない11歳の少年。これが顕如上人の最終判断であった。



顕如上人譲状

秀吉方はこの譲状を吟味して顕如上人の自筆と認め、すでに宗主の座についている教如上人には10年間宗主を務めた後、准如上人へ譲るようにと指示。教如上人もそれを受け入れる。ところが納得のいかない側近達はその譲状を偽書だと騒いだため、秀吉は激怒。もしその証拠を出せないならば教如上人は即刻辞職、准如上人を継職させるよう命じる。

結果、本願寺の第12代宗主は、准如上人が就任する。



第12代・准如上人

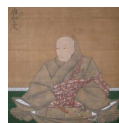
東西本願寺、分派へ

しかし、教如上人こそを次代（第12代）の宗主と仰ぎ、その人格に宗主たる大器をみた者も多くいた。慶長3年（1598）に秀吉が没し、なお支持者の多い教如上人に徳川家康が接近。慶長8年（1603）、烏丸六条に寺基を与える。

これにより事実上、本願寺は二分され、堀川通り側が「西本願寺」（本願寺派）、烏丸通り側は「東本願寺」（大谷派）と呼ばれるようになる。巨大な宗教勢力である本願寺を二分することにより、二つの本願寺がお互いを牽制し合い、均衡を保たせるという政略的な理由。



浄土真宗本願寺派
龍谷山 本願寺（西本願寺）



准如上人



真宗大谷派
真宗本廟（東本願寺）



教如上人

「護法」のため

戦国時代という強烈な時代を、大きな責任を抱えて生きた顕如上人と教如上人の父子。最終的に両者は袂を分かつことになったが、二人の思いはただ一つ、「仏法を護る」ためであった。

昨年は親鸞聖人によって浄土真宗が開かれてちょうど800年を迎え、今なお念仏の教えは護り伝えられている。その背景には、文字どおり「懸命」に教えを護っていかれた無数の御門徒、先人たちの思いを忘れてはならないだろう。

秀吉、大坂本願寺跡に大坂城を築城



大阪城公園内にある名号碑

本願寺津村別院・北御堂ミュージアム

